

## 第5章 移行・導入

### 5.1 システム移行・導入

#### 5.1.1 システム移行・導入とは何か

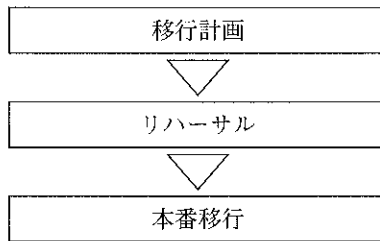
最近ではシステムを全く新規で構築するよりも、既存システムを再構築する機会の方が多くなっています。

その場合、再構築したシステムの本番稼働を行うには、現行システムのデータ引き継ぎや、ハードウェアやソフトウェアの切り替え作業を行う必要があります。

これらの作業がシステム移行です。

システム移行を行い、本番稼働を迎えるまでの一連の作業をシステム移行・導入と言います。

#### 5.1.2 システム移行の流れ



#### 5.1.3 移行計画

移行は本番稼働への切り替え作業であることから基本的に一発勝負となります。

そのため「いつ」「誰が」「何を」を明確にすることが重要で、それを明記するのが移行計画書です。

項目	内容
移行概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>前提条件、業務や他システムへの影響</li> <li>移行失敗時の切り戻し方針</li> <li>「一括移行」「段階移行」「並行運用」などの移行方針</li> <li>移行フェーズ（工程）</li> </ul>
移行対象	<ul style="list-style-type: none"> <li>データ、ネットワーク、設備などの移行対象要素</li> </ul>
移行テスト	<ul style="list-style-type: none"> <li>移行ツールのテスト方法</li> <li>移行リハーサル方法</li> <li>移行テスト環境</li> </ul> ※詳細は「移行テスト仕様書」としてまとめる
移行スケジュール	<ul style="list-style-type: none"> <li>マスタスケジュール</li> <li>フェーズごとの詳細スケジュール</li> </ul>

## 第5章 移行・導入

移行手順	・全移行作業の作業手順 ・作業のタイムチャート ※詳細は「移行手順書」としてまとめる
切り戻し手順	・切り戻し作業の作業手順 ・作業のタイムチャート ※詳細は「切り戻し手順書」としてまとめる
サービス開始基準	・移行成否の検証方法と判断基準
移行体制	・作業ごとの体制と役割分担

### 5.1.4 リハーサル

リハーサルの目的は移行手順の内容と各作業に要する時間を確認することです。

#### (1) 作業手順の確認

移行手順書に基づき作業を行い、手順に漏れや誤りがないかを確認します。

また、誤解や勘違いが起きやすい表現のチェックも行います。

確認内容は抽象的な表現ではなく、何がどうなるべきか詳細に記述します。

例えば、「正常にバックアップされること」ではなく、「xxフォルダにxxファイルが作成されること」のように誰が見ても間違いなくチェックできるように記述します。

#### (2) 作業時間の確認

移行は旧システムから新システムへの切り替え作業であるため、作業に許される時間は限られています。

そのために各作業に要する時間の確認は重要となり、より正確な時間を計測するために、リハーサルは可能な限り本番時と同様の条件で実施する必要があります。

特にデータについては本番時と同様のデータ量でリハーサルを行い作業時間の妥当性をチェックします。

リハーサルにて実際に計測した時間をタイムチャートに反映し作業スケジュールの精度を高めます。

リハーサルは1回ではなく何度か繰り返すことで、より精度の高いものとなります。

### (3) 切り戻し確認

どれだけリハーサルを行っても本番時には想定外の事態が発生する可能性があります。

これは一般的に本番データはリハーサルデータよりも大容量でパターンも複雑であることから、リハーサルでは検知できないケースがあるためです。

移行は時間との勝負でもあるため、万一本番移行が不可能と判断された場合は元のシステムに戻す必要があります。

これを切り戻しと言います。

リハーサルでは切り戻しの手順と時間も確認する必要があります。切り戻しも許された作業時間内に完了させることが必要だからです。

切り戻し手順と時間が明確になることで、本番移行作業中止の「判断基準」が明確になります。

限られた時間内で行う本番移行は、続行か中止かを素早く判断する必要があります。そのためにも「判断基準」は重要となります。

#### 5.1.5 本番移行

移行手順書に則り本番移行を行います。

本番移行は時間との勝負です。タイムチャート通りに作業が進んでいるか、各作業の進行状況と照らし合わせ進捗の確認を行います。

手順書に記載された内容と異なる事態が発生した場合、トラブルの状況を迅速に把握し管理者に報告します。

管理者は、切り戻しの「判断基準」を基に続行か中止かを判断します。

リハーサル時に切り戻しの「判断基準」を明確にしておくことで迷わず決断することが可能となります。

また、本番当日以前に移行可能なものについては、事前に移行することで本番当日の作業軽減を図ります。

## システム移行のチェックポイント

## 準備時

- リハーサルを実施し、手順を検証済みか
- リハーサルで見つかった問題点は改善し検証したか
- リハーサルと本番とで手順等に差がある場合、それを洗い出しているか
- 本番環境（機器・場所）は準備したか
- 移行関連ツールは検証済みか

## 作業実施時

- リハーサルで検証済みの工程表・手順書などを用意したか
- 事前移行できる移行対象は移行済みか
- 移行過程にチェックポイントと判断基準を設けたか
- 素早く状況を把握する仕組みを作成したか
- 移行後の検証方法は明確になっているか
- サービス開始基準を明確に定めたか
- 正常時だけでなく、トラブル発生時や障害発生時を考慮した体制を整えているか
- ハードやソフトなど関連するベンダーに待機してもらっているか
- 作業確認がダブル・チェック可能な体制か
- 移行の作業続行や切り戻しを、誰がいつ判断するか決まっているか

## 5.2 ユーザ教育

会社の上層部で決定された新システムの導入は、その目的を実際に使用するユーザが理解していない場合があります。

ユーザは仕事のやり方が変わるのを嫌うため、一方的に新システムを押し付けても導入の効果は望めません。

プロジェクトはシステムをユーザが使いこなす、導入の目的が達成されて初めて成功となります。

そこで必要となるのがユーザ教育です。

ユーザ教育のポイントを以下に示します。

## ・教育期間の決定

ユーザ教育は本番稼働前に終える必要があります。ユーザは日々実業務に追われているため早い時期からの日程調整を行う必要があります

## ・教育対象ユーザの選定

全ユーザを教育することは不可能です。各部署や使用機能別に代表者を選定します

## ・操作マニュアルの作成

システムの操作方法を説明したマニュアルを作成します。開発者視点ではなく利用者（ユーザ）視点で作成することが重要です

## ・教育内容

システムの使用方法の説明だけではなく、何故このシステムが必要なのか？どう使用するべきなのか？など、システム導入の目的を説明することが重要です